

「障害者によるデザインワークショップ開催の為の方法研究」

大久保 晃

はじめに

十数年前から障害者教育、障害者とアートの関係については漠然と関心を持っていた。そしてこの事に関するシンポジウムやワークショップにスポットとして関わる事はあった。

2年前にNPO法人「日本障害者芸術支援協会」設立メンバーとして1年間理事を務めた時から、長いスパンで障害者芸術教育の意味を考えるようになった。これがモチベーションとなりこの2年間、多くのサポートを頂き、障害者を含むアートスペースの調査研究及びワークショップの実験的開催を行ってきた。こうして若干でもこれら日本の芸術活動の一端を知るようになると、アートという行為の不思議さと不確かさ、そしてその可能性を考えざるをえない事になる。そしてアート、表現、創作、障害者、健常者、芸術家、芸術教育全てがカオスとなり、分ける意味を見出せなくなってしまった。

芸術表現が貢献出来る事は何だろう、創作の源にあるエネルギーや発露を考えた時に、障害者と健常者の芸術教育を線引きする意味は何だろう。この疑問が自分を含めた表現活動の新しい感覚を芽生えさせた気がする。物の豊かさを実現した20世紀に変わり、精神性や心の問題がクローズアップされる今世紀に必ず取り沙汰されるのもアートの存在であ

る。しかしアートを通してどのように自分の内なるものを引っぱり出していくかについては明解に語られてこなかった。多くの人々がその指導者たる人間を探しているようだが、現代美術家はそれに気付きはじめた。障害者の創作行為そのものに多くの「表現」に対するヒントが隠されているのではないだろうか。

本稿では、この2年間でリサーチ・研究した障害者活動及びアートワークに関する報告と計画・実行したワークショップ等の実践結果を紹介する。

1. 障害者芸術活動の調査・研究報告

本年度は以下の施設等に訪問・連絡・資料調査を行った。

- ・平成15年5月 伊勢原市立中沢小学校養護科 北山静子教諭より授業実践等に関する資料提供。
- ・ // 7月 伊豆障害者施設・工房・店舗「駿豆学園」訪問
- ・平成15年8月 日本障害者芸術文化協会へのインタビュー及び資料の提供を頂く。
～11月 以下の施設・工房・ワークショップ等を中心に取材、資料提供やパブリシティ・文献等による研究を行った。
 - ◆工房絵（神奈川県平塚市）
 - ◆障害者の働く場「とまりぎ」（千葉県船橋市）
 - ◆アトリエ・ポレボレ（東京都中野区）
 - ◆茅ヶ崎市美術館（神奈川県茅ヶ崎市）
 - ◆金沢市民芸術村（石川県金沢市）
 - ◆若宮病院（山形県山形市）

2. ワークショップ等の活動報告

- ・平成15年8月 地域の障害者と健常者による共同ワークショップ
 - * 於：湘南デザインスタジオ（神奈川県茅ヶ崎市）
 - * 参加人数：小学生4名、中学生5名、サポートスタッフ3名
 - * 内容：色材・紙材による表現体験とデザインへの応用。木版画制作。
 - * 応募方法：今回は公募をとらず、地域への呼び掛けで実験的に開催した。
- ・平成15年11月 「絵の夢」ワークショップ
 - * 於：八王子市夢美術館（東京都）
 - * 参加人数：20名×2日間 サポートスタッフ3名、学芸員2名
 - * 内容：色材による表現体験とデザインへの応用。時計の文字盤デザインに応用する。木版画制作。
 - * 応募方法：一般公募。八王子市関係広報媒体。健常者、障害者を問わず広く公募。小学校3年以上。
- ・平成15年12月 ワークショップスタッフ及びボランティアとの全体会議
 - * 今年度の研究・活動状況・反省点等報告
 - * 次年度の研究・活動展望、具体的提案等

3. アートスペースの存在意味（研究・活動を通しての所感）

ここではワークショップ（創作活動）及び作品展示発表等を含めた形で運営されている場を総称してアートスペースと考える事にする。そして障害者、健常者の括りを外したところで考えてみると、その運営形体は様々である事が分かり、法人化したもの、公営施設、無認可の作業所と呼ばれるもの、株式・有限会社のものまであり、それぞれの与えられた環境の中で創意工夫がなされている。ごく小規模のボランティアも含めると、総数は把握しきれないが、顕著で継続的な活動が認められるスペースが国内に約50ヶ所考えられる。もちろんそのシステムは多様で、それぞれの哲学が反映した活動を展開している。「障害のある人達のアートスペースづくりの目的は、社会的に価値を低められている人達の能力を高める事、社会的なイメージを高める事・・・生きる力を高める事を主眼としている。」（日本障害者芸術文化協会理事 播磨 靖夫）

この主旨は設立主旨と考えればいいだろう。しかし運営主旨はこれに加える事がひとつある。「障害者という存在意識が健常者から無くなる為の場」となる事ではないだろうか。それは更に言えばアートスペースは健常者の隣に違和感なく障害者が存在する社会環

境を創出する為の出発の場であるとも考えられる。その先を言うとすれば、障害者の為の協会やそれだけを看板に掲げた施設やスペースが皆無となる事であり、単なるアートスペースが増える事が望ましい。

欧米社会では福祉、芸術、教育の分野を統合したアートプロジェクトが生まれ、アートスタジオ、ギャラリーが機能し、それらの多くは一般に開かれている。多くのコミュニティの偏見を解き、理想的な形がある。

日本の多くのアートスペースも解放されているとはいえ、まだまだ見えにくい部分が多い。多くの公設美術館がいい例かもしれない。箱ものと批判されてきた美術館も独立行政法人等の波も手伝って変革期に立たされている。企画力も更に必要となり、欧米のような解放・連携が進み、多くのアートスペースとの関係も見直す必要が出てくるだろう。アートを見る側からの先入観の解放として、美術館の存在理由が今後大きくなっていくと同時に、アートを「する」のは一部の芸術家のものではない事を紹介していくのがアートスペースであり、そこにいる障害者や健常者である。

しかし皮肉な事に今までの美術館は、良い作品を美術館でしか見られない状況を作り、アートを敷居の高い別世界のものにした功罪がある。

今こそその償いをすべく、美術館がキーステーションとなり、地元ローカルのアート関係施設とのネットワークをコーディネートするべきである。

4. 無意識は意識から作る（アートスペースの設置方法）

アートスペースを作るのに理屈はいらない。物心共にバリアフリーであるとか、交通の便とか、スタッフとか、予算とか考えればきりがない。多くのスペースの取材で「取りあえず始めてみた」という声を聞くと安心する。主催者が創作の場が欲しいと思って始めてしまう事の重要性を物語っている。一緒に活動する仲間の中には障害者を持つ人もいるのだから計画通りにやろうとしても無駄かもしれない。だからまず彼らとアートスペースを始めればいいのである。

アートスペースを作る時、明解な哲学や指針は必要だろうか。

湘南にある「工房絵（こうぼうかい）」は授産施設である。授産施設の目的は「知的障害者福祉法の理念に基づき、知的障害者で雇用される事が困難な人に職を与える。もしくは就労の為の援助を行い、1人の人としての豊かな自立生活が実現できるよう援助する事」となっている。これは障害者の自立と尊厳を充分に主張できる理念となっている。

工房絵の設立当初は高校卒業後の障害者の駆け込み寺でしかなかったようだ。工房絵に感じるものは大袈裟な指針ではなく、収入をちゃんと得るという夢があることだ。それは効率の良い収入ではなく、人を作り出す事こそが「稼ぐ」でありアートの本質だとも言っている。

東京・中野にある「アトリエ・ポレポレ」は日本障害者芸術文化協会が1996年から運営している、障害のあるなし、年齢、職業、様々な差異を超えて自由に作品を創作するスタジオである。誰でも参加したい時にその日のチケットを購入して参加するスタイルが気楽で好感が持てる。月に2回という非常に限られた活動でも、そこに関わった人達はこれまで経験した事のない豊かな時間を共有している。障害、健常といったこれまでの偏った関係性を、アートを通じて同じ表現者として豊かな関係へと変えられたという。

「金沢市民芸術村」は1996年に公立文化施設として初めて「24時間運営」・「市民による自主運営システム」を導入した。アーティストであり工房ディレクターの森田ゆかり氏は「文化や芸術が特別なものになり、市民の日々の生活からかけ離れすぎていないだろうか」という疑問、私達アートに関わる者も小さく仕切られた世界の中で『芸術の為の芸術』をつくり、自己満足に終わっていない

だろうかという反省が幾つもあった。」施設の設置理由はアートの存続方法にも関わっている気がする。

これらアートスペースに共通する事は、意識的に始める事がいすれ無意識の行動になり得るという事ではないだろうか。

私が八王子市夢美術館でのワークショップの参加者公募、啓発を担当学芸員にお願いするまで、障害者への参加啓発に関しては、苦慮した。最終的にこの事に関しては、学芸員に一任した。そしてこのワークショップの告知媒体には、特に障害者参加可能の一文は掲載しなかった。しかし私と学芸員の共通認識として、参加希望の障害者は充分に受け入れる姿勢だった。

しかし障害者の参加は皆無に等しい状況だった。認識や姿勢は実行ではないのである。確かにワークショップの告知に障害者参加可を唱わないのは差別のない姿勢ではあるが、行動と結果に結びつかなかった。わざわざ書く事でもないこの事を意識的に掲載しなければ、まず障害者は遠慮して参加出来なかつたのではないだろうか。現状では表記する事をより意識的に行う事で、障害者の参加や存在を当たり前に、つまり無意識にしていくしかない。

作品展示の方では、エイブルアート展他幾つかの展覧会がマスコミにも多く取り上げら

れ、障害者作品である事を感じさせない広報・展示マネージメントで成功している。

障害者が社会の中でマイノリティーである事を考えた時、その存在位置を明確に伝えていく為には、相当の意識的行動が必要になってくると思う。

5. アートマネージメントの必要性と方向

前述したエイブルアート展他多くの障害者の展示を観て思う事は、その展示及び作品の裏側に障害者達の誇り高き様子がうかがえる事だ。障害者にはアーティストの基本的な素質と行動や行くべき方向等の全てが含まれている気がする。そして制作だけに打ち込める彼らにこそ、それを前面に押出す仕事、つまりアートマネージメントが必要になってくる。そう考えた時、アートマネージメントの現場となるアートスペースは意識的に障害者のスペースとして設置する事でかまわないのである。この事により障害者の純粋なアート性を多くの一般が学び、創作や表現姿勢においては我々が障害者にかなわない事実を認知する。これにより自然と人の中での区別が意味を持たなくなってくる。アートマネージメントこそが、表現において、マイノリティーとマジョリティーをシャッフル出来る行為になると思う。

6. アートの効用

ここ十年近く、日本障害者芸術文化協会会長の嶋本昭三氏と懇意にしていただき、創作・教育両面で御指導を頂いている。嶋本先生は、一世を風靡した「具体美術協会」の創立メンバーで、著名な現代美術家であり、京都教育大学等で美術教育にも携わってこられた。氏と雑誌対談をした時にも感じた事であるが、アーティストとしての彼の創作への向い方は、まるで子供のようであり、喜々としており、屈託がないのである。これは同じ現代美術家の岡本太郎にもいえる事だが、表現したいという意志と衝動が絶妙のバランスで、気持ちよく発せられる様子が伺える。これは知的障害者の表現の発動に似ている。これが出来る彼らは、いったいその素質をどうやって獲得したのだろうか。彼らは自ずと居心地の良い制作位置をみつけ、伸び伸びと表現する。例えば嶋本先生が50年代に繰り広げたビンに絵具を詰めてキャンバスに投げ付けるいわゆる「アクションペインティング」を創出された。表現が目的を目指していない純粋な表現の1つといえる。壁にビンが当たり、割れて絵具が飛び散る快感は、制作者だけのものではなく、観る側も体感する。アートの魅力はここに凝縮されているのかもしれない。創る者、観る者がその表現行為そのものと出来上がった表現結果の両方からそれぞれ

の気持ちを共有することになる。これは正に障害者とのワークショップやアートスペースにおいて頻繁に経験する事実なのである。

アートの「癒し」の効果については、芸術療法、アートセラピー等多くの実践の中で認知されてきているが、これは障害者・健常者の壁を超えての指導方法があるだろう。

人間の行為には目的を達成する為の行為と、行為そのものが目的という2つが考えられる（アリストテレスのキネシスとエネルギア）。芸術やその表現活動は本来その行為そのものが目的であった筈であるが、社会性のあり過ぎた人間は、経済活動を含む様々な要因の中にアートそのものも放り込んでしまい、本来アートが一番持っている魅力や効果を一般の人々から遠ざけてしまった。そして唯一それを（多分無意識に）感じ、アートの効用を享受しているのが、一部の表現者であり障害者かもしれない。そしてアートの本質を教えられるのも彼ら以外にはいない気がする。しかしだけでこの項目で「アートの効用」を唱っている事自体が、自由にアートを受け入れていない事実なのである。美術家の横尾忠則氏は「現代美術は特殊なものになってしまった・・・筆を持つ芸術など最早過去のものにされてしまったり、感動よりも観念、つまり知的に認識されるものになってしまった」と述べている。この事に呼応するように、

障害者を中心とするアウトサイダーアートやエイブルアートは概念化された美術とはまったく逆の方向の美術かもしれない。子供が無心に何もないところから絵を描きはじめるような、ピカソも目指した方向こそ、行為が最大目的のアート活動といえよう。

ここでひとつ間違わないようにしなければならないことがある。ここまで述べてきて否定するようであるが、障害をもつ人々が全て無垢なる表現活動を行えるかといえばそうではない、彼らもある意味特別でないという事である。嘘をつく人もいれば見栄をはる人もいる。そう考えた時に、若干彼らの中に純粋に表現活動の出来る素養が多く隠されていると考えた方が自然だ。その素養の多さを充分に引き出せるのがアートスペースでありアートマネージメントなのである。日本社会が成熟していく中で、人間と人間、人間と自然、人間と社会を繋ぎ、質的な変化をつくっていく表現＝アートの役割が注目されているという事は、多くの人々とアート、或いは人と人を結ぶインターフェイスが必要になってくる。それはアートマネージャーではなく、表現を純粋に展開する障害者達なのかもしれない。勿論彼らは何かを表現する時、社会のためにとか人の為になどと妙な目的は持たない。その目的に喚起させるのが美術教育に携わる者であり、アートマネージャーの役割だろう。

殺伐とした無表情な、お互いが閉ざされたままでしか、生活出来ない現代社会で、我々は物以外の事でどれだけの満足感や幸福感を得られているだろう。今我々に精神的な心地よさを与えられる方法の1つがアートだとすれば、それは人間が生きる事を助け、人間の取り巻く状況を変えていく事にも発展していくと思う。しかしアートの効用を考えはじめたとたんに魅力的なアートを創造する事は難しくなる。アートがその行為で始まり行為で終わるだけのものと考えた時、それをサポート出来るマネージャーの位置は重要になる。余計な事が出来て、それをしてしまう健常者と違って表現の時にはそれしか出来ない多くの障害者にとってそれが突出した才能に転化する。我々は彼らのそういう姿に学ぶ事によって、本来、公共の場に充分にあった暖かみや慈しみ、充足感を取り戻せるのではないかだろうか。そしてそのミニマムな研究の場としても、アートスペースやワークショップの広がりが必要になってくる。

7.今後の活動・研究の方向性

ここ数年間の障害者教育の実験作業（ワークショップ）及び調査研究において気付いた事は、障害者と健常者の交流・コミュニケーションの場が広がり、また、これに関する啓発が様々な形で発信されてきているのに反し

て社会全体に障害者へのぎこちない対応も多くなっている気がする。それは、開かれた美術館と銘打ちながら、結局美術館に納められたアートと言われるものが管理され、敷居が高くなり、表に出なくなる状態に似ている。

何かをする時に、その器（箱）の準備は大切である。しかしその箱の余計な管理の為に、場としての風通しが悪くなり、その場の管理が目的となり中身が見えにくくなってしまう事例も多い。

前述したように、あるアートスペースの代表が言った「取りあえずそこにある物・場所で始めてしまう」精神こそが、開かれたワークショップを継続していくきっかけとなるだろう。

そしていずれ、「障害者」という冠がとれた施設・空間・ワークショップが増えて、これらに関する協会・団体が基本的に解消する事が望ましく、意識的な活動が無くなる事を望みたい。

今回の研究レポートをきっかけに次年度に向けて、

●機会ある度に、少人数でのワークショップを多く実験開催する。

●アートスペース・ワークショップとの情報交換・交流発表の可能性を探る。

●障害者美術教育関係各所の更なるネットワーク化の可能性を調査研究。

以上3点を中心課題として、考えていきたい。

8.参考資料

- ・「新しいアートの始動」エイブルアートフォーラム講演録／エイブルアートジャパン編・刊
- ・「このアートで元気になる・エイブルアート'99」日本障害者芸術文化協会編・刊
- ・「ABLE ART・魂の芸術家たちの現在」たんぽぽの家編・刊
- ・「ふしぎのアーティストたち」田島征三著旬報社刊
- ・「癒しとしての自己表現」嶋本昭三著エイブルアートジャパン刊
- ・「文字精霊」グループ文字屋編・刊
- ・「みずのきの絵画・鶴小屋からの出発」西村陽平著東方出版刊
- ・「Art Brut」Lucienne Peiry著Flammarion刊
- ・アトリエAUTOS】秋山住江著小学館刊
- ・「アトリエAUTOS・土とクレヨン」秋山住江著小学館刊



写真1 表現体験（八王子市夢美術館ワークショップ/2003年）



写真2 表現体験（八王子市夢美術館ワークショップ/2003年）

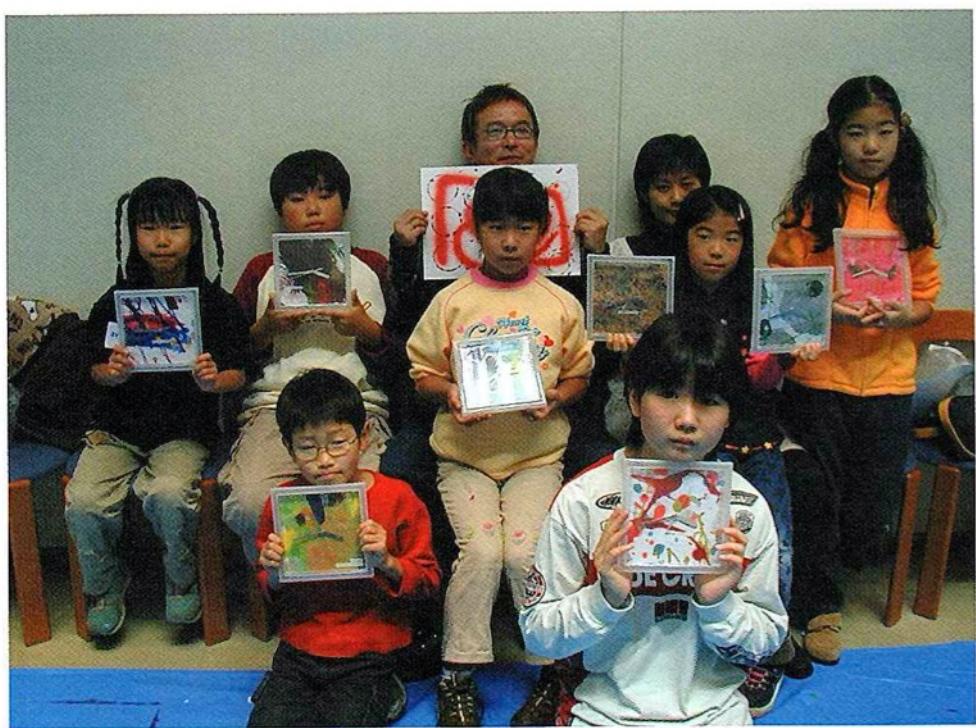


写真3 表現体験→時計デザイン（八王子市夢美術館ワークショップ/2003年）